

# いごっそうとはちきんの争い

～文化人類学への実験経済学的アプローチ～

1150395 上田 健太郎

高知工科大学マネジメント学部

## 1. 概要

日本人は、人間性を形作る気質・性格というものが、県によって大きく違いがみられる。そのため県民性ということばがあり、同じ県や地域で育ったからこそ共通する特徴が生まれている。各県の県民性がどのようなものなのかについては、昔から長い時間をかけて、研究者たちが地域を渡り歩いて見聞きし、その地域の歴史を鑑みて分析がされている。そのような文献の中で、県別のデータとして挙がっている事実を、県民性と関連付けて紹介していた。例えば、高知県の離婚率が昭和10年から45年にかけて一、二を争っている事実があり、これは高知の男性の頑固で非妥協性ないごっそうな性格や高知の女性の負けん気の強いはちきんな性格によるものだとある。しかし一方で高知県は所得の低さが全国でトップクラスでもある。文献の中では、そのデータが県民性によるものであると決め付けるだけの根拠が薄く感じられた。また、文献で参考としていたデータが古いものであり、そのデータから分析できる県民性は今の県民には当てはまらないかもしれない。そこで本研究では、高知県の離婚率の高さが県民性によるものなのか、または他の要因によるためなのかを実験経済学的アプローチで検証する。そうすることで文化人類学の見解が正しいか、それとも考えられてない要因があるのかが分かる。そして、現在の若者に先に挙げられたような県民性がみられるかどうか調べる。

## 2. 背景

高知県の県民性には、男性がいごっそう、女性がはちきんという言葉でよく表される。いごっそうが表す県民性をまとめてみると、行動は大胆不敵にして豪快。はなはだしく頑固、強情で妥協しない。物事を曖昧なままにしておくことを嫌い、白黒をはっきりつけたがる。このような気質が昔からよく言われている。『新・人国記』（朝日新聞社）によると、「がんこで、一徹で、一度こうと思えば、はたからなんと言われようとも、金輪際耳をかそうとしない。土佐人の代表的な

性格」とある。他に思いつくままに挙げると、わがまま、負けず嫌い、つむじ曲がり、片意地、偏屈、傲岸不遜、大酒飲みなどの特徴がある。

次に女性のはちきんということばが表す県民性には、話し方や行動などがはっきりしており快活、気のいい性格で負けん気が強い。後ろを振り返ることなく前進し続けるといった頑固さや行動力があふれる。などが挙げられ、いごっそうな男性を尻目に、芯が強く、ガンガンバリバリとしゃにむに前へ前へと働きに働く。働くばかりでなく、遊ぶときや徹底的に遊ぶ。酒も大酒呑みの土佐男に引けをとらない。このような気質がある。

昭和25年から42年の間に離婚率が全国1位であり、1998年度は全国8位と未だに高い順位にあるというデータがでている。この離婚率の高さについて、文化人類学の見解では、いごっそう・はちきんな高知の男女の気質が原因だとしている。しかし1997年の県民一人あたりの県民所得が2,376,000円と全国平均の3,190,000円を大きく下回り、全国の中でも所得の低い県だということもあり、経済的な面などに原因があるかもしれない。

## 3. 目的

高知県の男女と高知県以外の男女を集め、男女の争いゲームをプレーする実験を行う。この実験を通して、文化人類学が指摘する高知県民のいごっそう、はちきんといった気質が本当に観察できるかを検証し、その結果を元に、高知県の離婚率が高い原因に、県民性が影響しているという文化人類学の見解が正しいのかを検証する。

## 4. 研究方法

男女で2つの選択肢を選び合い、お互いの選択の組み合わせによって得られるポイントが変わる状況においてどのような意思決定をするのかをみる実験を、高知県民の男10人女10人の男女10組と高知県民以外の男10人女10人の男女10組に対して行う。しかし、高知県男女に対する実験では男が8人、女が10人しか集まらなかったため、男女ペア8組、女

女1組で実験を行っている。そしてその結果から、いごっそう・はちきんといった気質が観察できるかを検証する。

以下で実験の内容を説明する。今回行った実験は、2人ずつペアになって行う簡単なゲームであり、ペアの組み方はコンピュータが自動的に選ぶ。各ペアは、実験を行う実験室にいる男性1人と女性1人で構成され、高知県男女の実験での1組のみ、女性2人で構成される。被験者のペアになる相手は、実験中変わることはない。被験者にプレーしてもらうゲームのルールは次の通りである。まず、AまたはBの2つの選択肢のうち、どちらか片方を選択してもらい、2人の選択によって、ポイントが決まる。男女の選択が一致したとき、2人にとってポイントが高くなるが、男性はAで一致したときに高く、Bで一致したときにはポイントが低くなる。女性は男性とは逆で、Bで一致したときのほうがAで一致したときよりも得られるポイントが高くなる。男女の選択が一致しなければ、ポイントはお互い最も低くなる。それらの得られるポイントを表としたものが下のポイント表である。

		女性	
		A	B
男性	A	4, 2	1, 1
	B	1, 1	2, 4

このような意思決定を10回繰り返してもらい。実験終了後には、獲得ポイントの1ポイントにつき50円とした金額を賞金として支払う。つまり、仮に実験終了後の合計獲得ポイントが10だとすると、実験から得られる賞金の500円と、参加報酬の500円とを合わせた、1000円を謝金として支払う。この賞金を実験中のモチベーションを保つ材料とする。

この実験が想定しているシチュエーションは、交際関係にある男女2人がお互い同じ時間に何をして過ごすのかを決める状況である。その時に、自分の好きなことを押し通す決定を下すのか、または相手の意見を踏まえ2人のことを考えた決定を下すのかをお互いの意思決定により分析できる。例えば、今日何をしようかと男女2人が考えている。男性は野球を見に行きたい。女性は買い物に行きたいとする。この2人の今後の進展を考えると、それぞれが別のことをして過ごすとも進まない。それどころか後退してしまうこと

も考えられる。しかし、どちらかが自分のことよりも相手のことを考えて選択をしたとしたら、2人の進展につながる時間を過ごすことができる。そのような想定で、実験中に得られるポイントの設定をしている。この実験を繰り返し行ってもらうことで、実験中のお互いの意思決定の変化などから特徴を見つけ、高知県民同士の場合とその他県民同士の場合で、県民性が色濃く出ていないかどうかなどの比較をする。

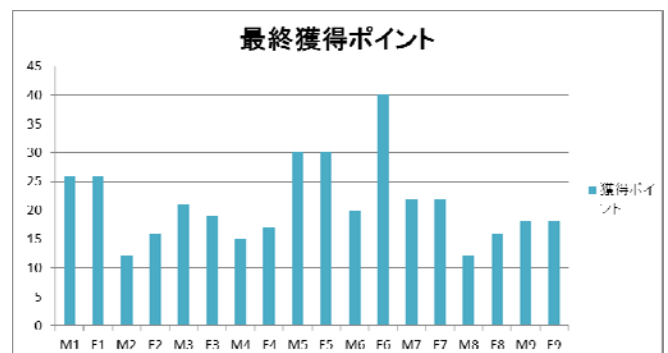
さらに被験者には、実験後に、それぞれの県民性を図るアンケートに答えてもらう。アンケート項目は全部で22項目であり、高知県民の県民性について推し量る項目が9項目、愛媛県民の県民性のものが6項目、香川県民の県民性のものが3項目、徳島県民の県民性のものが4項目である。この22項目をランダムに並べて、各項目の質問に、はいかいいえで答えてもらう形式である。

## 5. 結果

### 5.1 被験者の情報

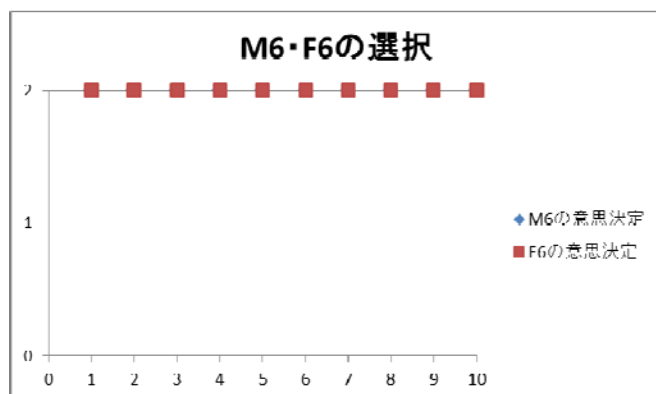
高知県民同士の実験では男性8人、女性10人が実験に参加した。実験が男女同数で行う性質のため、くじ引きを行い女性から1人男性役を選出し、男性9人(男8人女1人)・女性9人の9ペアで実験を開始した。

10回の意思決定後の最終獲得ポイントをグラフにしたものが下のグラフである。獲得ポイントの平均は、21.11ポイント(小数点第三位で四捨五入)である。最低点は12ポイント、最高点は40ポイントであった。



ここで注目したいのが、まず、一人飛びぬけたF6の被験者とそのペアであるM6の被験者である。このM6・F6のペアのそれぞれの被験者の選択は、男性がBを選び、女性もBを選ぶという選択であり、その意思決定を第1回目から10回目までの全てで行っているということである。そのため、F6の被験者にとっては、ペアの相手と共に同じ時間や話題を共有し、かつ自分の好きなものやことをできるという訳で、獲得

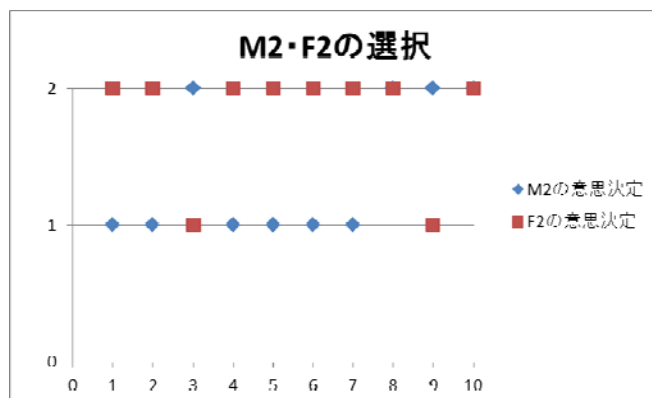
ポイントが最大となっている。この結果は、実験で獲得できる最高得点であり、想定したシチュエーションで考えると、どちらかが、自分の望む選択よりも相手の望む選択を優先し、その選択による結果に満足して2人の時間を過ごすということになるだろう。または、第1回目の意思決定の結果が、F6の被験者にとって一番よい結果となり、F6の被験者はこのまま同じ選択を続けると良い可能性が生まれた。そしてペアの相手であるM6の被験者は、自分にとって最もよいポイントを獲得できる選択は他にあるが、その選択をしてすれ違いが起こり、得られるポイントが下がるよりも、F6の被験者がこのまま同じ選択を続けることを見越して、同じ選択をしたというような意思決定があったのではないか。この結果は、すれ違いなどが起こり、男女の間の溝が深まり、離婚に踏み切っていくこととは最も離れた結果となっていると考えられる。下のグラフはM6・F6の被験者のペアのそれぞれの選択を散布したものである。



M6の選択を表した、青い菱形の点が見えなくなっているが、実験のどの回でもBを選択し、ずっと一致しているのが分かる。

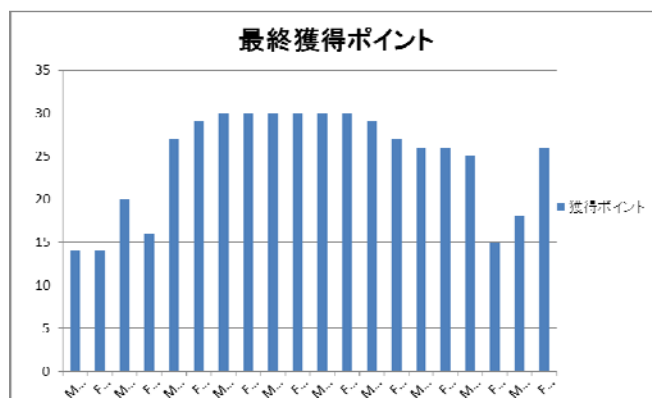
反対に、すれ違いが多く起こった結果が出ている被験者はというと、M2・F2、M8・F8のペアである。

右の散布図は、そのうちのM2・Fの被験者のペアのそれぞれの選択を散布したものである。先に載せた、M6・F6のペアの選択の散布図と比較すると、選択肢の変動がみてとれると思う。



高知県民以外の県民同士の実験では、男性10人、女性11人が実験に参加した。実験の定員を超えたため、くじ引きを行い女性の参加人数を10人とし、男性10人・女性10人の10ペアで実験を開始した。

10回の意思決定後の最終獲得ポイントをグラフにしたものが下のグラフである。獲得ポイントの平均は、24.6ポイントである。最低点は14ポイント、最高点は30ポイントであった。

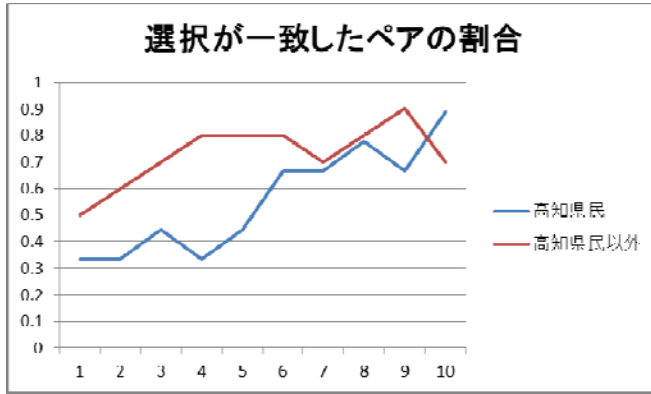


高知県民以外の県民同士の最終獲得ポイントは、平均して高く、男女共に30ポイントを獲得した～なペアが三つあったことが特徴である。ちなみに男性は、兵庫県、京都府出身がそれぞれ2人であり、香川県、岡山県、長崎県、愛媛県、三重県、鹿児島県がそれぞれ1人である。

女性は、愛媛県、兵庫県がそれぞれ2人であり、熊本県、大分県、大阪府、岡山県、新潟県、香川県がそれぞれ1人である。

## 5.2 選択が一致したペアの割合

1回目から10回目を通して、ペアの選択が一致した割合は高知県民同士の実験では52.2%、高知県民以外の県民同士の実験では73.0%であった。



折れ線グラフは、実験で選択が一致したペアの割合を、高知県民と高知県民以外で比較したものである。回を重ねることにより最終的には、高知県民も高知県民以外も全体のペアの男女の選択が一致し、ナッシュ均衡となる割合が高くなっている。高知県民以外では、3回目、4回目から選択を一致させるペアの割合が高くなっているのに対し、高知県民同士では、割合が高くなったのは6回目に達しだしてからであり、このことから高知県民の頑固で負けず嫌いな気質が観察できる。

## 6 まとめ

高知県民同士の実験での各ペアの選択が一致した割合と、高知県民以外の県民同士の実験での各ペアの選択が一致した割合とを比較してみると、高知県民同士のほうが割合が低く、確かに頑固で負けず嫌いな気質が見られた。

## 引用文献

[1] 日本人を知る研究会『県民性の統計学』角川 one テーマ 21

祖父江孝男『県民性 文化人類学的考察』中公新書

祖父江孝男『県民性の人間学』ちくま文庫

Camerer Colin, *Behavioral Game Theory*, Princeton